

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：35302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02998

研究課題名(和文) グローバル共生を可能にする英語教育 共感的異文化理解の概念化と検証

研究課題名(英文) English Education for Global Symbiosis: Conceptualization and Verification of Empathetic Intercultural Understanding

研究代表者

奥西 有理 (Okunishi, Yuri)

岡山理科大学・教育学部・教授

研究者番号：50448156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル社会における他者との共生を可能とするため、異なる背景を持つ他者と共感的な関係を築くために必要な認知行動上の特徴を探った。国際協働・交流の実践場面から抽出した。日本人学生の異文化間関係性形成の障壁となっている特徴が抽出された。「巧遅志向の自己開示」「日本人集団内ポジションの確立」「外国人との固有の関係形成」といった概念が該当した。これらは日本人集団内での共感的な理解には多いに貢献するも、異文化間関係性形成においては、機能しない可能性が高いことが指摘された。対日本人の盲目的な信頼関係の見直し、建設的異文化間関係の構築の第一歩となる可能性がみいだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

共感的異文化理解を伴う異文化間の対人関係形成について探索したところ、共感的異文化理解が意図された日本的な認知・行動やコミュニケーション上の特徴は、阻害要因となっていることが明らかとなった。日本人学生に独自の認知や行動上の特徴と異文化人材の認知や行動上の特徴には大きな開きがあるが、この齟齬の大きさについて日本人学生が無自覚であることがわかった。日本的な認知・認知行動を相対化できるような心理教育の必要性が明らかとなったが、英語教育を通してだけでなく様々な手法で、より早期教育として行われるべきであるとする示唆も得られた。

研究成果の概要(英文)：In order to enable coexistence with others in a global society, the cognitive and behavioral characteristics necessary for building empathetic relationships with others of different backgrounds were explored. The results were extracted from practical situations of international collaboration and exchange. The characteristics that serve as barriers to the formation of intercultural relationships among Japanese students were extracted. The related concepts included "skillfully delayed self-disclosure," "Closed and reserved self," and "Avoidance of confrontation" etc. It was pointed out that these concepts contribute greatly to empathetic understanding within the Japanese group, but are not likely to function in cross-cultural relationship formation. The self-reflections of blind trust among Japanese were found to be the first step in building constructive intercultural relationships.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

研究分野：異文化間教育学

キーワード：異文化理解 異文化接触 対人関係形成

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国を挙げてグローバル人材育成が推進されるようになって久しい(例えば文部科学省 2011)。グローバル人材とは、世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら広い視野に立ち、異なる言語・文化・価値観を乗り越えて関係を構築するコミュニケーション能力や、新しい価値観を創造する力と考えられているが、実際は、日本では単に「高い英語コミュニケーション能力」として捉えられることが多い。積極的に英語を用いて、科学技術の発展や経済的利益の向上の貢献できるという現在の人材育成モデルは、日本の多くの若者にとって当事者意識を持ちにくいということが指摘されている。

2. 研究の目的

多くの若者が「自分には合わないと感じている」(文部科学省, 2015)というグローバル人材育成モデルを転換し、地球市民として他者への共感性を生み出すような教育モデルを示す。英語を学ぶ意味を、経済と結びつけたグローバル人材の育成に求めるのではなく、地球社会における人類の共生に見出し、英語コミュニケーション教育における心理学教育に注目した人材育成モデル提案し、教育実践を通じて効果と課題を検討する。最後に、教育実践を踏まえ、新しい時代のグローバル教育について提案を行う。

3. 研究の方法

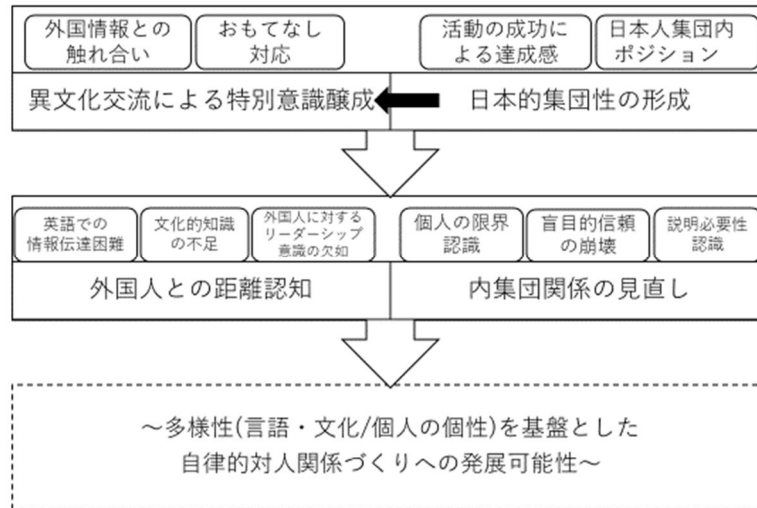
異文化間シミュレーション教育、質問紙調査を通じて、日本人大学の有する異文化理解にまつわる認知・行動上の特徴を把握して日本人の異文化理解の本質について全体像を明らかにする。これと関連して教育実践(多文化集団との国際協働・交流プロジェクト)を実施し、参加者の異文化対応力の伸長を検証し、併せて異文化間教育上の課題を抽出する。

4. 研究成果

異文化間のシミュレーション教育は、日本の小学校にイスラム教徒の生徒が転入してきたという場面を設定し、ハラルとお祈りに関する異文化葛藤事例を用いて、116名の大学生が異文化葛藤を分析するという手法を用いた。日本人学生の異文化葛藤にまつわる感受性と日本文化理解の内容を探った。分析を行ったところ異文化葛藤の原因として認知されたものは、「日本独自の教育風土」と「未熟な異文化理解力」という2つに大別された。前者に関しては、日本独自の教育風土を異文化葛藤の要因とする分析結果が多く見られ、給食や校内清掃等の特有の文化的な教育方法が葛藤要因となっているというもの、日本人の集団意識が異なりへの抵抗感を増加させているというもの、日本人教師の権威が葛藤要因に寄与しているというものが含まれていた。後者に関しては、日本人の異文化理解が未熟であることが葛藤原因を生じさせているという分析であり、異なる他者への視点の欠如や異文化受容体験の欠如が葛藤要因となっているというものと、宗教への無関心や無理解が葛藤要因となっているというものを含んでいた。シミュレーションを用いた教育においては、自己の文化的特徴を振り返った上で異文化対応への脆弱さがあるとする振り返りが多く見いだされた。シミュレーション教育の段階では、高い異文化理解力と、葛藤の帰責性を自文化に置きやすいという特徴がみられた。

国際協働・交流という国際教育実践場面においては、異文化間の対人関係形成において、シミュレーション教育において見られた、振り返りを反映した内容はみられず、日本人間の固有の人間関係を築くことに重点が置かれ、それをベースとした外国人との関係を築くことが志向されていた。外国人大学生が多文化間の対等な対人関係を志向するのにに対し、日本人を含んだ多文化集団の対等な関係や多文化集団へのリーダーシップという概念を持つには至らなかった。但しその段階に至る萌芽として、日本人同士の関係性において、互いの盲目的心理が崩壊していく状況がみられ、そこから、多文化人材との対等な対人関係の構築という、次のステージへと進んでいく

可能性が示唆された（以下図参照）。



本研究結果からは、異文化学習における認知学習が効率よく進むのに対し、行動を伴った学習においては、異文化間対人関係形成には確固たる障壁が生まれるという問題が浮かび上がった。日本人学生にとって英語を使った外国人とのコミュニケーションを伴うプロジェクト学習は、自己満足と自己成長を促すものであるが、文化背景を異にする他者目線に立った双方向的な対人関係の形成、共感的な異文化理解の実現には更に多くの課題が見られた。解決のためには、英語教育の域にとどまらない、より多面的で長期的な異文化間教育手法の開発とその検証が必要であると考えられた。グローバル教育は、大学生を中心に一部高校生を対象として学校教育場面で展開することが主流であった。しかし、長期的視野を持ち、日本人同士の関係の持ち方がより柔軟で自己のアイデンティティーの確立も流動的な発達段階にある児童生徒を対象とした実践も、青年期以降の異文化間能力の育成の基盤を築く上では、重要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 奥西有理 | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 多文化メンバーとの国際教育活動を通じた日本人大学生リーダーの関係性認知 多様性理解に基づく関係への発展可能性 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 多文化関係学 | 6. 最初と最後の頁 85-92 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 奥西有理、木村純子 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 中等英語教育における異文化理解教育実施可能性の検討：検定教科書における文化的多様性とグローバルイシューに関する分析 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 岡山理科大学紀要B人文・社会科学 | 6. 最初と最後の頁 127-132 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 奥西有理、谷口弘一 | 4. 巻 55(B) |
| 2. 論文標題 21世紀に求められる資質・能力とPISA調査による測定 PISA2018グローバル・コンピテンスの概念と測定を中心として | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 岡山理科大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 129-136 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 奥西有理 | 4. 巻 54(B) |
| 2. 論文標題 言語教育を通じた多文化への関心とコミュニケーション意欲の育成 欧の言語教育における異文化間能力育成に関する知見の概観 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 岡山理科大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 33-39 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 奥西有理 | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 日本文化理解を促す外国語教育の実践 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 岡山理科大学教育実践研究 | 6. 最初と最後の頁 41-49 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 奥西有理 |
| 2. 発表標題 教員養成課程学生の考えるムスリム児童との異文化共生方法 |
| 3. 学会等名 日本国際理解教育学会第28回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 奥西有理、藤井友貴 |
| 2. 発表標題 Steering Future Teachers to the Mastery of English as a Lingua Franca |
| 3. 学会等名 The 17th Asia TEFL International Conference and The 6th FLLT International Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|